



# 北海道の輝く農村づくり 活動事例集 II



今こそ  
地域力が  
試されるとき



北海道

北海道は過疎化・高齢化が急速に進み、地域をどう維持していくかが大きな課題になっています。特に農村地域は、その傾向が顕著であり、後継者不足などにより農業生産や優良農地の確保に懸念が生じているとともに、お祭りなどの集落行事が減少し、そこに暮らす人々のコミュニティ機能が低下しています。

このように、農村地域の維持が困難になりつつある中、都市と農村の交流などによる地域づくりを進めるため、食や環境などの魅力的な資源を活かした多様な活動が全道各地で展開されています。

このような頼もしい活動団体や熱意のある実践者相互の情報交換、さらには連携した取組を進めるための全道のネットワークとして、「北海道農山漁村地域力ネットワーク」が平成21年に設立されました。

今回、このネットワーク組織の協力を得て、道内において特徴ある取組を行っている活動団体の中からいくつかをピックアップして、『北海道の輝く農村づくり活動事例集Ⅱ』を作成しました。

本冊子には、活動のノウハウや地域づくりリーダーなどの思いが詰まっていますので、それぞれの地域で参考にさせていただき、農村集落の維持・活性化に向けて、地域力が発揮された活発な活動が全道で展開されることを期待するものです。





CONTENTS

3 5	3 5	2 9	2 3	1 7	1 1	4
	高齢者の暮らしを支えるマネジメント NPO法人北見NPOサポートセンター（北見市）	農業と福祉が連携した乾燥野菜づくり るもい農業「人」と「食」の交流推進協議会（留萌市）	地域の未来をともし「有機農業」 大空町の食と農を考える協議会（大空町）	楽しみながら地域の資源を発掘！ しむかっぶふるさとふつつくふくらむ協議会（占冠村）	集落の隠れた宝『ひだから』ガイド 日高地域活性化協議会（日高町）	子どもたちの地域への愛着を育むプロジェクト うらほろスタイル推進地域協議会（浦幌町）



占冠村 鶴川



## 子どもたちの地域への愛着を育むプロジェクト

### うらほろスタイル推進地域協議会（浦幌町）

豊かな自然に恵まれた十勝管内最東端の町、浦幌町。  
学校と地域が一体となったまちづくりに取り組み、  
今、全国から注目を集めている。

十勝管内の最東端の町、浦幌町。  
緩やかな丘陵に囲まれた町の中  
央部を浦幌川が流れ、豊かな耕地  
を作って、太平洋に注いでいる。  
昆布刈石展望台から太平洋の彼  
方を望めば、襟裳岬や釧路までが  
一望できる。太平洋沿岸には美し  
い海岸線が続き、豊北原生花園に  
は、町の花であるハマナスなど3  
00種もの海浜・高山植物が咲き

#### 全国から注目を集める

#### コミュニティ・スクール



ほこる。  
町内には随所に考古学的遺産  
があり、研究者の注目を集める。  
今からおよそ6550万年前、恐  
竜絶滅の原因となったといわれ  
る巨大隕石の衝突を裏付ける地  
層が見られるのは、アジアでは唯  
一、浦幌町だけなのだ。こうした  
古い地層からは世界最古の貝の  
化石が発見されている。中には、  
「ウラホロミジンソデガイ」「ウ  
ラホロハイカブリニナ」等、地名  
をとって命名された新種もある。  
縄文早期の浦幌新吉野台細石  
器遺跡からは、昭和9年に日本で  
初めて石刃せきじんぞく文化が発見されて  
いるし、十勝太遺跡群には、12  
00年前の竪穴式住居跡が約5  
00基残っている。こうした貴重  
な遺跡を見ると、いつの時代も変  
わらずに、自然の恵みを受けた人  
間の暮らしがここにあることを  
思わずにはいられない。



漁協女性部や町の婦人会のお母さんたちから鮭のさばき方を教わる

人口はおよそ5千人。農業と林業と水産業のバランスがとれた一次産業の町であるこの浦幌町で、学校と地域が一体となって取り組むまちづくりが平成19年にスタートした。今や文部科学省が推進するコミュニティ・スクールの優良事例に取り上げられ、全国から注目を浴びる「うらほろスタイル」だ。

コミュニティ・スクールとは、「学校運営協議会」を設置している学校のこと。教育委員会から任命された委員が、学校運営の基本方針を承認したり、教育活動について意見を述べたりする。すなわち、地域住民や保護者が一定の権限と責任をもって学校運営に参画する仕組みだ。

未来を担う子どもたちの豊かな成長と、子どもや学校の抱える課題の解決のためには、「地域でどのような子どもたちを育てるのか」「何を実現していくのか」という目標やビジョンを地域住民と学校が共有し、連携して子どもたちを育てるべきであるという考え方に基づいて推進されている。

このコミュニティ・スクールの優良事例「うらほろスタイル」は、いかにして始まったのか。そのきっかけは、町唯一の高校の閉校だ

った。

### 町にたった一つの高校が

なくなつた

この町の人口が最も多かったのは昭和35年。この頃、町にはおよそ1万4千人の住民が暮らし、22校の小学校、16校の中学校、1校の高校があった。しかし、人口の減少とともに学校の統廃合が進み、現在では、小学校は2校、中学校は2校、高校は平成22年に閉校して、浦幌町は高校のない町となった。

町の子どもたちは多くが進学や就職で町を離れていく。高校が閉校した今、子どもたちは隣町の高校に通わなければならない。町との関わりが薄いまま、子どもたちが町を離れていって、本当にいいのだろうか。町の居酒屋に集まった小学校のPTA役員や先生

の間でそんな議論になった。「この町には仕事もないし、進学先もないのだから子どもたちに居続けなさいとは言えない」「でも、このまま人口が減り続けていいのか」「地域の活性化とは何か」「地域は何を目指すのか」。そんな議論の末にたどり着いた答えが「町を持続させること」だった。

なぜ地域の活性化が必要なのか。それは、「この町を次の世代に引き継ぐため」。先人が残してくれたものを自分たちの代で終わらせるわけにはいかないから。でも、子どもたちに「この町に残りなさい」とは言えない。子どもたち自ら、この町に住み続けたいと思えるように、子どもたちが小学生・中学生のうちに、自分たちができることをしよう。こうして「うらほろスタイル」が生まれた。





民泊体験学習で町の産業に触れる

このまちに残りたいと思える  
人づくり

うらほろスタイルは、町の教育委員会や町内の小中学校の校長、役場、関係機関、地域NPOで構成される「うらほろスタイル推進地域協議会」（以下、「協議会」という。）が推進母体となり、小学

校、中学校を通して、子どもたちに町の魅力を知ってもらい、愛着を持てるような授業を学校教育の中で行っていく。そしてそれに町の大人たちが関わり、協力する取組だ。

小学2年生は、生活科の時間を活用して町の魅力を探るバスツアーに参加する。町にある留真温泉を訪れた子どもたちからは、「温泉は知っていたけど、来るのは初めて」という声も聞かれる。「この町には何もない」と思っていた子どもたちが、町の魅力に触れ、「自分はこの町のことについて、何も知らなかったんだ」ということに気づくのだ。

都会から地域づくりの専門家を招き、子どもたちが自分たちの言葉でまちを紹介する取組も行った。こうした活動を通じて、子どもたちの地域への自信や誇りは徐々に高まっていく。

毎年9月上旬には、小学5年生が町内の農林漁家に宿泊する民泊体験学習が行われる。一次産業が基幹産業であるとはいえ、農林漁家出身の子どもが少ない中、この民泊体験は子どもたちにとって生産者と出会える貴重な機会だ。始めに対面式が行われ、一人

ずつ自己紹介をした後、各家庭に分かれて農作業等を体験する。最初は緊張している子どもたちも、優しく接してくれる「おじさん」「おばさん」のおかげで徐々に緊張がほぐれてくる。体験の内容も様々で、収穫体験や木材加工体験、酪農体験、漁業体験など、そのどれもがそれぞれの農林漁家でしかできない貴重な体験だ。

「農家さんがとても優しく接してくれて、すごく楽しい2日間だった」「とれたての野菜がこんなに美味しいとは知らなかった」「これからは好き嫌いをしな

いようにしようと思った」と子どもたち。子どもたちを受け入れた生産者も、町内で子どもたちと顔を合わせると「この前は手伝ってくれて助かったよ。またおいで」と声をかける。そんなつながりが生まれている。

小学6年生は修学旅行で札幌を訪れる。この時、JR札幌駅西口の改札前で、町のPRをするのが恒例になっている。学校の畑で育てたジャガイモと、町民に教えてもらい作ったジャガイモのレシピ、手作りのパンフレットを街行く人に手渡しながら、自分たちの町の良いところを子どもたちがPRするのだ。見知らぬ人に対して初めはなかなか声をかけられない子どもたち。それでも一人が声をかけると、みんなもどんどん声をかけ始める。すべてのパンフレットを配り終えたときには、皆、達成感に満ち溢れた



札幌駅で浦幌町をPR

笑顔だ。「子どもたちが一生懸命に自分の言葉で町の良さを話してくれたことに胸を打たれた」という手紙がパンフレットを受け取った人から届いたこともある。中学3年生で取り組むのは「町の活性化案の発表」だ。グループ



町のことを考え、活性化案を発表する

ごとに町を活性化させるにはどうしたらよいかを考え、町長や役場職員、地域住民の前でプレゼンテーションをする。「町のキャラクターを作りたい」「町の特産品を使ったお弁当を販売してはどうか」。こうした子どもたちの思いを受け止め、実現するのは大人たちの役割だ。町のキャラクター「うらは」と「ほろま」や町の特産品を使ったお弁当「浦弁」、

町の一番大きなお祭り「みのり祭り」で設置される「ふわふわドーム」等は、子どもたちの提案を実現したものだ。子どもたちからはこれまでに80を超える提案が出された。これらの提案をどうしたら実現できるかを大人たちが考える「子どもの想い実現ワークショップ」を月に一度、公民館で開催している。成人式の時には、中学3年生の時に提案してくれた案が実現したのかどうかを報告している。今もあなたたちの提案をこの町の大人たちはしっかりと受け止めているよ。そんなメッセージを伝えていく。

### みんなで一歩ずつ取り組む

平成19年に始まったうらほろスタイルは10年を経過した。PTAの役員と先生の意見交換から始まったこの取組は徐々に広

がり、役場が参画し、協議会が設立され、町の計画に位置づけられ、現在はコミュニティ・スクールへとその形を徐々に変えてきている。この間、「この町が好きだ」「この町に住み続けたい」という子どもたちは増加している。「本当はこの町にいたいけど、仕事がないから町を出るしかない」という声も聞かれるようになった。せっかく町に愛着を持ってもらった子どもたちに住み続けてもらいたい。そのためには仕事づくりが必要だ。今、うらほろスタイルでは、若者のしごと創造事業として、特産のハマナスを活用したハーブティーや化粧品づくりに取り組んでいる。

一方、子どもの想い実現ワークショップに参加する有志からは、「自分も町のために何かをしたいと思うようになった」という声も聞かれる。

これまで取り組んできた中で、実感していることがある。それは、「子どもたちが変われば大人たちが変わる」ということ。子どもたちの一生懸命な姿を見て大人たちが変わるのだ。もし「子どもたちのために」という軸がなかったとしたら、これほどまでには広がらなかったのかもしれない。

うらほろスタイルは、「地域を次の世代に引き渡す」という目標に向かって、活動をスタートさせた。この取組が一部の人の活動ではなく、「みんなの活動」になったのは、目指すところを共有するプロセスがあったからだ。メンバーの一人は語る。そして「子どもたち」のためだからこそ大人たちがまとまることができた。ここに、地域づくりが目指すものについて大きなヒントがあるように思えてならない。

## この町を次の世代に

### 引き継ぐために

「浦幌の良さを知れて本当に良かった。自分たちが考えた企画の中から一つでも実現されればいいなと思いました。この先どこへ行っても浦幌というまちに誇りを持ち続けて生きたいです」  
「素晴らしい所、綺麗な所があっても、外の人に知られていないから人が来ない。自分のまちの魅力を知らない時点で、その魅力を我慢することもできない、だから私たちはがまちをよく知ることからはじめないと」。この町で育ってきた子どもたちの言葉だ。

どれぐらいの子どもたちがこの町に帰ってきてくれるだろうか。帰ってきてもらうにはまだまだ仕事が少ない。それでも、この町に対して愛着を持って出ていくのと、そうでないのでは大き

な違いがあると思うのだ。地域で大切にされていることを感じた子どもたちは自己肯定感が高いとも言われている。これからの人生、自信を持って生き抜いてほしい。そして、いずれこの町に帰ってきてくれたら嬉しい。

中学3年の活性化案発表会で、町の野菜を使ったスープを作りたいと発表した子どもたちは、成人して町に戻り、冬のイベント「しゃっこいナイト」でスープを販売。自らの提案を自らの手で実現した。いつか帰ってきた子どもたちがこの町で新しい仕事を自ら作ってくれるかもしれない。そんな希望も湧いてくる。

町について語り合う中で見出した「たった一つの答え」。それをみんなで共有し、一步一步進んできた。地域活性化の目的は、地域を未来につなぐこと。未来に子どもたち。子どもたちのために何

ができるかを考えよう。その思いを共有した大人たちによって、地域が子どもたちにバトンタッチされていく。「次につないでいてほしい」。そんな思いを子どもたちに託して。



豆の植え付け。若手農業者が先生役



地域リーダー  
からのひとこと

子どもが変われば大人が変わる 大人が変われば地域が変わる

うらほろスタイル推進地域協議会会長 門馬 孝敬

まちづくりは人づくり

人づくりは意識づくり

「うらほろスタイルプロジェクト」は、「持続可能な地域の実現」という「基本理念」のもと「子どもを将来の地域づくりの担い手」として明確に位置づけ、子どもたちが町に残らない、戻らないのは「地域に対する愛着・誇りが充分に育まれていない」との発想のもと、子どもたちが「地域の魅力や価値の再発見を」することにより「愛着・誇り・自信」を作り上げることを目的とする「子どもを軸とした」取組です。

今年も、浦幌の子どもたちは「うらほろスタイルふるさと学習」の中で、小学6年生は「修学旅行において札幌駅」で町のPRを行いました。真剣なまなざしで町を知ってもらおうと声をからして説明する子

どもたち。中学3年生は町の活性化のために知恵を出し合って「活性化案を発表」をしました。高校生は、町のイベントを盛り上げようと「みのり祭り」で汗だくになって手作りピZZアの販売をしました。私は、こんな直向きな子どもたちの姿を見たとき、なぜこんなに子どもたちが成長し「町のために貢献したい」という気持ちに変わるのかいつも驚きます。町内魅力発見ツアー（全学年）や農林漁家民泊体験（小学5年生）など教室では味わえない、実体験により多くの人との関わりを通して、「人・命・心・食」のつながりを実感し、人の温かさや、ふるさととの良さを認識することで、地域の一員であることを自覚し「当初は浦幌には何もない」と言っていた子どもたちが地域に貢献したいという意識が生まれたと感じています。



民泊体験で林業を学ぶ



高校生自ら企画しピZZアを販売



子どもの想い実現ワークショップ

一方、子どもが提案し子どもの想いが詰まった「町の活性化案」を実現するための大人のワークショップでは、参加者に意識の変化が見られます。「自分が町について考えるきっかけになった」「自分も町のために何かしたいと思うようになった」「子どもの見方が変わった」等々アンケート結果から全員が意識の変化があったと答えています。子どもたちの町に貢献したいと



町の魅力を発見するバスツアー（中学生）

いう想いが、大人につながり、子どものためには何かをしたいという想いが生まれ、「当事者意識の高まり」や「子どもに対する責任」といった大人の意識が変わってきています。子どもを軸にした取組から生まれた「学び会」は、子どもから大人へ、そして地域を変えていく力になっていきます。

## 未来へ・世代を繋ぐ

これまででは、小学生から中学生までの取組が中心でしたが、大人に夢を託していた子どもたちがすでに成人を迎え、自らの想いを自らの手によって実現する世代になってきました。浦幌には今では高校がありませんが、高校生はいます。地元高校生の「浦幌部」の結成により、小学校、中学校、高校、そして社会人へと「うらほろスタイル」の取組は「世代」をつなげるための新たな段階に入りました。これからも自立した私たちが地域に誇りを持ち、地道でありながら継続性のある地域づくりを進めていきたいと思っています。



門馬 孝敬さん

未来を担う子どもたちが夢と希望を抱けるまちづくりに情熱を注ぐ。





## 集落の隠れた宝『ひだから』ガイド

### 日高地域活性化協議会

日高山脈のふもとに広がる小さな町、日高町日高地域（旧日高町）。  
十勝に抜ける高速道路の開通で交通量が激減し、昨夏からは災害で日勝峠も通行止めに。  
その影響が今も残る中、集落への誇りを回復する活動が展開されている。

日高町日高地域（旧日高町）は、日高山脈の山々に囲まれた小高い場所に位置する自然豊かな町だ。いつ訪れても町全体を覆う樹木の精気が感じられて、とても清々しい気分になる。この日高山脈は、世界的にも珍しい地質を持つ。地球の表面を覆うプレート同士がぶつかって、めくれ上がって山脈が出来たために、地下の深部から積み重なった地層がそのまま地表に顔を出す格好になった。地下深くに存在するかん

#### 自然の宝庫 日高地域



らん岩という深成岩などが、プレートが衝突した反動などで、地表でも簡単に見ることができる。かんらん岩は、一般的に地表に表れるまでに蛇紋岩という岩石に変化するため、地表で目に見えるところは世界的にも限られている。

このような地質学的に貴重な日高山脈は、希少な動植物を育み、一級河川「沙流川」という風光明媚な清流を生んでいる。さらに谷は深く険しく、稜線は細く、アプローチは長いという山の特徴が、国内外の熱心な登山愛好家を惹きつける。

この自然の大きな恵みを受ける日高地域は、平成18年に、太平洋沿岸の旧門別町と、間に平取町を挟んで飛び地合併をして、人口の多い門別地域に自治機能を移す代わりに、旧町名を残すこととなったのである。そして、平成21年には占冠から十勝に抜ける高速道路が開通した。この影響で、日高地域の中心



ワークショップでは大学生が聞き役に

を通る国道の交通量が激減。ドライブインや飲食店の撤退が相次ぐなど、経済的に大きなダメージを受けた。20年前は、2,500人以上いた人口が、今や1,500人と約1千人も減少した。地域の元気が失われていった。そんな地域で、集落の誇りを取り戻す活動が展開されている。

## 日高のお宝さがし

事の発端は、町役場日高総合支所が国の事業を活用して、地域の将来像を話し合ってもらおうと、農村地区の千栄（ちさか）地区住民を集めて日高地域活性化協議会を結成したことに始まる。平成20年のことだ。まず、協議会の会員の集め方がユニークだ。このような会を結成する場合、町内会やPTAの会長とか農協の組合長とか、町の名士を集めるとというのが一般的だ。しかし、役場が声をかけたのは、農家のお母さんや民間会社の奥さん、移住者など、普段行政の表舞台に出てこない属性の人たちだった。役場担当者の考えはこうだ。「町の名士を集めて話をすると、行政への要望が多くなってしまふ。それよりは、若者とか女性をメインにして、企画を話し合ってもらった方が良い」。協議会を

作り、ワークショップを開催していくのだが、実際のワークショップのやり方も工夫している。「大学の先生なんか来ると住民もその気になるので、以前から知っていた北海道大学の地域づくりの先生に、アドバイザーとして来てもらったんです。それから、お年寄りの話を引き出してもらうために、先生に研究室の学生を連れてきてもらうようお願いしたんです」。地域のお年寄りには、普段慣れないワークショップなどの話し合いでは、どうしても遠慮や躊躇が出てしまう。そこで、外から若者たちに来てもらうことで、お年寄りも孫に接する気分で気軽に話してしまうという読みだ。これがまんまと的中する。入植当時はどうだったとか、昔のお祭りや行事はこんなのがあったとか、食べ物はこのなものを食べていたとか、地域の歴史や文化、暮らし、食などに関する様々な資源が掘り起こされた。聞いて

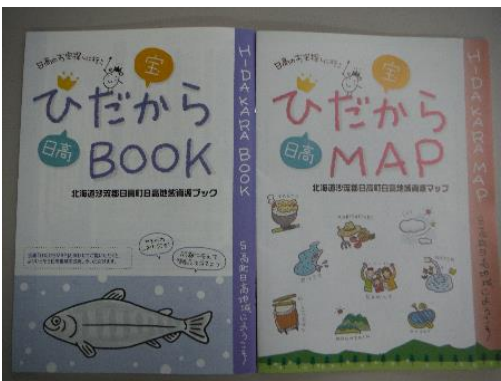
ている集落の若者や女性も知らなかったような、びっくりするようなトピックの続出。「地域には眠っている資源が一杯ある」。

この経験をきっかけとして、今一度、地域の資源を見直そうという動きになった。これが地域の沈滞ムードを打開する魅力発見につながるかも知れない。いよいよ本格的に日高地域の宝さがしをスタートさせるため、日高地域全体の若者と女性に声をかけて協議会組織を拡大した。地域の生き字引的な存在である先達を集め、聴き取りすることを度重ね、さらに先達の記憶を頼りにフィールドワークを行って宝のありかを突き止めていった。

## その名は『ひだからBOOK』

「行政が作る観光パンフレットは面白くない。自分たちが手づくりした独自のパンフを作ろう」。地域





の隠れた宝を発掘していく作業をしていく中で、協議会のメンバーからこんな声が上がった。一般的に、行政が手掛けるパンフレットは、観光スポットを網羅し、そこにグルメコーナーとして、主な飲食店を掲載するものが多い。それだと、地域の歴史や文化などを含め、地域そのものの魅力を発信することが難しい。実際に地域に住んでいる協議会のメンバーが、日高ってすごいねと感じるトピックを掲載することで、内

向きなパンフかも知れないが、逆にそれがこの地域を訪れる観光客などに受けるかも知れないという発想だった。

それからが大変な作業だった。聴き取り調査などで積み上がった膨大なデータである歴史的建造物や景観的なスポットなど、その一つ一つを、由来などをまじえ、丁寧に執筆していった。そして、とうとう他の観光パンフとは一線を画す一冊が出来上がったのである。例えば、是非見て欲しいスポットとして並んでいるのが、「岩内不動」、「竜神さん」、「三井鉱山火薬庫」、「八田鉱山サンゴ滝と手堀トンネル」・・・とかなりマニアックだ。おそらく協議会メンバー以外の住民でさえ知らない人が多いだろう。ひだかのおたから、を文字って『ひだからBOOK』と命名。A5サイズというコンパクトさ。表紙には切り取って使えるしおりがデザインされている。

これは協議会のメンバーである農家のお母さんのアイデアだ。さらに、「ひだから」の位置を図面にプロットした『ひだからMAP』もあわせて作った。この『ひだからBOOK』は有料で一冊100円(税別)で、地域の観光施設などで販売されている。「ひだから」を巡って、冊子についている専用はがきにクイズの解答を記入して応募すると、地域の特産品が抽選で当たるなど、様々な工夫をこらしている。地域の魅力を発信するとともに、経済的な効果を生むように考えられているこの冊子。なかなか他の自治体ではお目にかかることはできない代物なのである。

### 地元住民をガイドに養成

#### そしてひだからエコウォーク

『ひだからBOOK』に「ひだから」を巡るコースを掲載した。全道

でフットパスの取組がクローズアップされていた。しかし単に来訪者が歩くだけだと、地域の歴史の謂れや住民の想いを伝えることができない。そこで、協議会では、会員だけでなく、町民や日高高校生に呼びかけて「ひだから」を案内するガイド養成講座を開設した。平成22年のことだ。

「ひだから」ガイドを養成するために、プロの登山ガイドを講師として招き、ガイド方法、プログラムの作り方やリスクマネジメント、救急法といったガイド技術を学び、樹木や産業などを、町内の有識者に学び、登山ガイドをお客様に見立てて実践し、ガイド経験を積み重ねた。

このガイド養成講座を進めていく中で、歴史の謂れ、特異な自然環境、開拓者の想いをテーマに据えたウォーキングコースを作ろうという機運が盛り上がった。そこで全国の事例を探すと、日本エコウォーク

環境貢献推進機構が取り組む「エコウォーク」の考え方が、協議会が取り組んできた内容と合致することに気付いた。エコウォークとは、地域の宝（自然、歴史、生活、文化など）を地元ガイドがひもとく、ガイドウォークのことだ。日高で設定するコースを、この機構に認定してもらうことで全国的なお墨付きを得ようと考え、機構事務局員を、ガイド養成講座講師として日高に招き、全国の取組について学習している。

こうしてガイド養成講座で始まった「ひだからエコウォーク」のコースづくりも大変な作業であった。まずはテーマ作り。地域の想いと来訪者が参加したいと思うようなテーマはどのようなものか。自然、歴史、産業・・・、こうして出来たコースは4つ。そのうち「開拓者の信仰と教育」をテーマとした「ひだからエコウォークコース」が「開拓民の心を支えた四国八十八・西国三十

三札所巡り」。『ひだからBOOK』に掲載された3つの寺院と地名の謂れ、今も地域に住む方の祖先が成し遂げた開拓時の教育環境の整備を盛り込んでいる。テーマが決まった後、ガイド養成講座の講師と受講生とで実際に歩き、ルートを決めて、ポイントごとにガイドする台本作りを手分けして作成し、実際に何度も歩いてガイドウォークを行い、コースを決定している。

こうして出来上がった「開拓民の心を支えた四国八十八・西国三十三札所巡り」は、ガイドが当時の開拓民を彷彿とさせる服装で、原生林を切り開く過酷な生活の支えになった神仏への信仰心、教育への想いを、軽妙な語り口で熱く語る。現在は、20名以上のガイドがいる。ひだからエコウォークの参加者は、1名ごとに2,000円を支払い、ここから保険料や事務手数料を差し引いた1,500円がガイドの

収入になる。

しかし、このエコウォークの取組は、お金以上の大きな価値をもたらしているのである。協議会の前会長は言う。「ガイドしてお客さんに喜んでもらうことも大切だけど、ガイド自身が自分たちの地域のことを詳しく知ること、さらに地元への愛着が湧くことの効果が大きいのです」。

### 目指すは集落に誇りを持つこと

日高のお宝さがしは、思いがけない動きをつくった。協議会に参加した千栄地区住民が、「漬物なんかもそれぞれの家で皆違う。そんな家庭の食を持ち寄って試食会をしたら面白いんじゃないか」。そこで、「千栄を食べよう大試食会」が開かれた。千栄地区にある様々な食材で作った実に多彩な料理が並び、それを皆で試食しながらワイワイと話が弾



む。

このことをきっかけとして協議会から独立した自主組織「千栄地区地域づくりネットワークチロロ」が結成され、中断していた千栄神社の宵宮祭や子ども七夕祭を復活させていった。これらの活動が、住民のつながりを強め、食を通じて地域の豊かさを実感できる場となり、地域活動が活発になっていった。そして平成28年夏の日勝峠が通

大試食会には大学生、子どもや食生活改善を担う保健師も参加



メンバーからの  
ひとこと

## 地域活動への想いと社会教育・地理学の視点

日高地域活性化協議会 会員 高橋 健

行止めとなった水害では、千栄地区 区の特徴を生かして、「千栄地区地  
中心の国道の橋が落下する大惨事 域づくりネットワークチロロ」が主  
であったにも関わらず一人の死傷 体となって、日高地域の中心部にあ  
者を出すことも無く、その後の孤立、 る道の駅「樹海ロード日高」で、千  
断水も地域が一丸となって乗り切 栄地区の農産物を用いた料理を開  
った。さらに、農業者の多い千栄地 発して提供する「ひだから食堂」を  
平成29年1月に開催。町内外から  
多くの来場者があり、今後も、農閑  
期に定期的に開催するそうだ。  
そして、ひだからエコウォークは、  
ガイドたちが地域の歴史や先人た  
ちの精神に触れて、自分たちの地域  
の良さを見直すきっかけになる。訪  
れる人たちへのガイドを通じて、自  
分たちの中に眠っていた地域への  
想いが呼び起こされる。この日高地  
域の活動は、まさに地域への誇りを  
育む取組なのだ。

### 北海道で感じた地域活動の重要性

私は、埼玉県の江戸時代は宿場町で栄え  
た街道筋で生まれて育ちました。長い歴史  
と古いしきたり、地域活動を重んじる地域  
で、それらが重荷として押し掛かり、それ  
から逃れる術はないかと思っていました。  
そうした中、埼玉とは風土の違う北海道  
に憧れ、道東の中山間地域の畑作農家での  
住み込みの農業体験や公民館での社会教  
育実習を体験し、また大学の専攻は地理学

だったのですが、社会教育を併せて学んで  
いく中で、重荷と感じてきた地域活動の重  
要性を感じるようになりました。

社会教育法第2条で、社会教育とは・  
学校の教育課程として行われる教育活動  
を除き、主として青少年及び成人に対して  
行われる組織的な教育活動をいう。と定義  
していますが、カルチャークラスやレクリエ  
ーション、文化事業などだけに限定された  
活動だけを社会教育活動と想像する方が  
多いので、農山漁村の地域力を高める活動  
とそぐわないというイメージをお持ちの



エコウォーク参加者と『ひだから』ガイド



地域の高齢者、若者と大学生が参加したフィールドワーク

方もいるのではないでしようか。  
 同法第3条第1項で、国及び地方公共団体は、この法律及び他の法令の定めるところにより（中略）すべての国民があらゆる機会、あらゆる場所を利用して、自ら実生活に即する文化的教養を高め得るような環境を醸成するように努めなければならない。さらに同法第5条の市町村教育委員会事務として、職業教育及び産業に関する科学技術指導のための集会の開催並びにその奨励に関することが明記されています。

### 社会教育活動から始まる地域づくり

私が学生時代に農業体験と公民館実習をした町では、住民の公民館活動から木工品が生まれ、地域産業として育つと共に、木工品を学校給食に用いてその器に入れる農産物や加工品を地域で生産するという活動に発展しています。

明らかに農山漁村の地域力を高める活動の原点に住民の社会教育活動があったのです。

地域活動の重要性、そしてそれを支える社会教育行政の役割への気づきを与えてくれた北海道の山村での社会教育活動にかかわりたいという想いが生まれました。そして札幌での就職浪人を経て、縁あって旧日高町教育委員会に社会教育主事補として採用され7年間、住民の社会教育活動の支援を行い、その後、13年間、観光や地域振興、移住促進行政に携わり、現在は学校教育と社会教育が連携して高校教育に取り組む町立日高高校の事務をしています。

### 地域づくりに欠かせない学習と

#### フィールドワーク

日高地域活性化協議会を結成したときも、社会教育の手法である住民が地域課題や地域資源を認識するための学習活動と地理学で学んだフィールドワークが必要不可欠であるとの思いから、活動の根幹に住民の学習活動とフィールドワークを位置づけて取り組みました。

農山漁村では、行政職員は地域住民でもありません。私は行政職員である前に地域住民であるという思いが強くあり、担当職務であろうが、無かるうが、今後も一住民として地域課題や地域資源を認識するための学習活動、フィールドワーク、地域活性化活動に取り組んでいきます。



高橋 健さん

地域づくりへの情熱を胸に秘め、黒子役になり集落を盛り立てる。